

東日本大震災 関連情報（第 32 報）

平成 24 年 9 月 4 日
全国老人クラブ連合会

東日本大震災に関する、老人クラブ関連の情報をお伝えします

●被災地における情報

○ 仙台市老連の会員数が、昨年より増えました [仙台市老人クラブ連合会]

昨年、津波被害の大きかった仙台市若林区、宮城野区の各老連では会員数を大きく減らしました。ところが両区老連において、今年は会員が増えたといううれしい報告がありました。仙台市老連全体としても僅かながら会員が増えています。市老連では、今回の会員増には、震災により人と人との絆を見直すことになったことが影響していると考え、新たに作成した入会案内パンフレットには、「災害時の絆」と記した呼びかけを入れました。添付の市老連からの報告の中にありますので、併せてご覧ください。また、添付報告に「別紙①」とある若林区、宮城野区からの報告につきましては、手書きのため、抜粋して下記に報告します。

(別紙「仙台市老連会員数報告」参照)

震災を乗り越えて 若林区老連会長 佐藤清一

大津波により沿岸部は壊滅的な被害を受け、当区老連だけでも会員 57 名の尊い命が犠牲となりました。七郷地区では 4 クラブ（154 人）が解散のやむなきに至りました。

一方、六郷地区では残った会員で小なりともクラブの伝統を守り、活動を継続しようとの地区老連会長の熱意のもと、解散はしませんでした。被災した 6 クラブの会員 395 名は 100 名に激減していました。この 1 年、他の区や地区に避難中の会員にも、地区の行事等には参加を呼びかける働きかけを続け、被災 6 クラブ 100 名の会員は 226 名までに復活、地区全体の会員数は 150 名増えて 361 名になりました。これも会員同士の絆を生かして、意欲ある活動を展開、会員増強に努めた結果です。

また、以前に市老連を脱退していたクラブが、震災後、復活加入の意志があるとして、地区老連会長・役員と懇談して復活加入しました。前途に先明を見る思いです。

名称変更して再出発 宮城野区高砂地区老連会長 田邊直毅

会員増強が議論される時、なぜか「老人クラブという名称」が取り上げられます。しかし私は「名前を変えても老人クラブは老人クラブ」という思いがあり、呼

び名に頓着したことはありませんでした。

当地区老連沿岸部の6クラブは、巨大津波の直撃を受けて多くの犠牲者を伴い、一旦は集落の壊滅と運命を共にしました。しかし、散り散りになった会員の安否を求めるクラブ会長の必死の努力の功か、5クラブは早期に奇跡の再生を果たすことが出来ました。再生した5クラブは、多くの犠牲者をだした「〇〇老人クラブ」の名称のままでいいのか、それで失った勢力の回復は可能なのか悩みました。結局2クラブが名称を変更し、その新鮮なイメージが新規会員を呼んだのか、会員増強に成果を示したのです。名称にこだわり、新規会員に存在を認められ、加えて地域の活性化に役立つなら、こんな喜ばしいことはありません。私のクラブでも、早速名称について相談したいと思っています。

[以上の報告は、月刊「全老連」10月号においても抜粋して掲載する予定です。]

●支援・交流活動

○ 支援へつなげようと、被災地へ思いをはせる旅が行われています

[大阪府東大阪市老連 ⇒ 岩手県釜石市、宮城県名取市]

[東京都東村山市老連女性部 ⇒ 福島県]

両老連が、被災地を訪れた記事が掲載されていたので添付します

(別紙、大阪府老連機関誌「ねんりんOSAKA」7月号、
東京都東村山市老連女性部会報7月発行号参照)

○ 福島へ贈り主不明のタオル届く [鹿児島県有志 ⇒ 福島県老連]

「鹿児島県有志」と記載されたタオル144枚が届いたお礼をしたいと、福島県老連が鹿児島県の新聞社へ送った手紙が記事になりました。鹿児島県老連から提供いただいた記事を添付します。(別紙「南日本新聞」7月13日号参照)